

歴史学者からみた韓国人の日本意識

金容徳(前東北亜歴史財団理事長)

東アジアの3カ国は、嫌いだろうが好きだろうが隣接している国々だ。隣近所同士仲良くし、将来の繁栄をともに企図できるのならこれ以上望むことはないだろう。このような夢を実現するために「東アジア共同の家」を作っていこうという理想論が定義されもする。しかし、理想論を論議するのも難しく、時々葛藤状況が表面化され、我々を挫折せざるを得なくなるのが韓国、中国、日本の三カ国間の現実だ。いつ噴火するかわからない地下の「マグマ」のようなものが潜伏しているためだ。

もちろん、今日の韓国人の日本に対する態度は一面的だったり、警戒的なことが多い。日本を全体的、かつ均衡に見るのではなく、過去の加害者という意識がそのまま残っていて、日本を常に否定的に見ているためだ。これによって、日本は警戒しなければならないという隣国の立場を変えないでいるのだ。特に、日本でこれまで繰り返されている事、例えば、教科書の歪曲であったり、総理の靖国神社参拝、従軍慰安婦の实在、そして独島(日本名:竹島)扮装などが知らされるたびに韓国人は、彼らの警戒的対日観が間違っていなかったことを確認するかのようになり、即日本を非難する。「マグマ」が噴火するのだ。これに反して日本人は、韓国の認識は過度に皮相的で、複合的であることが多い。今日の韓国の経済発展、政権交代の過程や韓流など、外見だけを見て韓国は、日本が容易に近づくことのできる国だと思えるのかと思いきや、北朝鮮のミサイルと核問題、日本人拉致問題、または韓国での極端な反日運動では不安と嫌悪感を示す傾向がある。

両国民が、相対国家を理解、認識する基盤は、相互間のかかわりを通じる歴史的経験にあるとしよう。韓国の場合、歴史的に日本とは友好的というよりも葛藤と蔑視、そして抵抗の経験が断続的につながり、そのため日本は、常に韓国に対して被害を与える国としてみる傾向が強かった。古中世時期、新羅の倭に対する警戒や、高麗末の倭寇の進入などに続き、豊臣秀吉の朝鮮侵略(壬辰倭乱)と近代大日本帝国の侵略と支配の記憶などが韓国人には生々しく残っているのだ。日本から受けた被害は、そのまま「伝説」となって韓国人の脳裏から消えないでいる。そのため韓国人は生来的に反日意識を抱えているといっても過言ではない。

反面、加害者としての日本人は、すべての韓国人が覚えている歴史的事実に対して非常に無関心だったり、理解できない状態にある。

過去の歴史、特に韓日関係の歴史に対してどのように認識するのか、またはどのように認識しなければならないのかにおいて様々な意見がある。まず、過去(歴史)という流れる川の水のようなものであるため、過ぎ去ってしまうほかないものだ。なので、不幸な過去は早く忘れ、新しい出発をすべきだという立場だ。流れる川の水のように、韓日間の不幸な歴史も自然と解消するという楽観的な立場だ。韓日間の現在を重要視しようとする人々がこのような見解を多く取っている。

もう一つは、過去の歴史という溪谷として考えるというみかただ。すなわち、歴史も、溪谷に谷間と丘が一緒にあるように、暗い面と明るい面が常に一緒にあるということだ。そのため、韓日間の歴史も暗い谷間だけを探さず、明るい丘も(または、丘を)見るべきだと強調する。不幸な過去の歴史を早く忘れるためには、逆に、歴史上の平和と反映の望ましい面を浮き立たせようとする人々がこのような見解を出している。

3つめは、過去の歴史を地層と同じように見るべきだというみかただ。歴史学者は誰でも、今、私たちが立っているこの土壌がずっと昔から人々が生きてきた地層が積もって形成されたように、今日を過去のすべての歴史が一つひとつ蓄積されてきた結果と見る。今、私たちの土壌が肥沃な面もあり、瘠せた面もあるように、過去のすべてを(不幸な経験を含んで)歴史の実態として厳正に受け止めなければならないということだ。なぜここが瘠せているのか、その瘠せた原因を追求すれば、肥沃に変えられる根源的処方を探ることができる。もし、過去の実態を明らかにしない時は、現在と未来を粉飾するために過去の歴史を歪曲したり、造作する可能性すらある。瘠せた土地といえどもその下の地層を掘って、原因治療すれば、肥沃な土地になるように、不幸な過去でもその実態を明らかにし、原因を探し出せば健全な未来の土台になるといえる。

開港前の伝統時代、韓国を含む東アジア3国では、性理学(朱子学)が支配の理念だった。当時としては、普遍的な理念体系だったとまで言える。よって、性理学的な秩序をより従う社会は「普遍的」先進文化を生活化している社会として、そうでない社会や国を文化的に軽蔑する傾向にあった。朝鮮時代、韓国の知識人らが持っていた対日優越意識は、ここから始まったといえる。

しかし、豊臣秀吉の侵略戦争で日本は朝鮮に無道な破壊と殺戮の傷跡を深く残してしまった。軽蔑した日本が意味のない朝鮮侵略をしたという事とともにとつともない被害を与えたという事実は、朝鮮末期まで多くの韓国人に日本に対する軽蔑感と被害意識を与えた。もちろん、朝鮮後期の実学者である李瀾(イ・イク)のように、「倭乱が終わって100年余りが過ぎ、侵略の責任者は全ていなくなり、残った人々は過ちを咎を直したので、これからは日本と和親しなければならぬ」と冷静に話す人もいなくはない。

時が流れ、朝鮮で日本に対する憎悪、軽蔑、被害意識が薄くなりつつある頃、日本は朝鮮に先立ち開港することになった。西洋の強国に開港を強要した日本としては、一日も早く西洋の国と対抗するため、指導者らがまず伝統的価値観を捨て、近代的科学文明と西洋的発展観を果敢に受け入れた。これに対して伝統的な性理学的価値観に執着していた朝鮮では、日本を既存の立場にたつて蔑視しようとした反面、日本は、近代的变化をできずにいる朝鮮に対して優越感を持つようになった。「征韓論」もこのような葛藤に起因したものだといえる。

もちろん朝鮮王朝でも近代的世界秩序に適応しようとする努力をしなかったのではない。高宗の時期をよく無能、腐敗した時期と描き、自ら開花する能力がなかった時期と把握する傾向があるが、実際は、高宗を含む支配層内部でも伝統を壊さない範囲内

で漸進的かつ自主的な改革を通じて近代化を推進しようとした。この時点で、日本は、韓半島に対する侵略を進行させていた。日本が朝鮮に対する浸透、侵奪、侵略の程度を増やしていった中で発生した、明成皇后(閔妃)の弑害や朝鮮内政への露骨な干渉は、韓国人の対日被害意識と日本との葛藤をより進化させた。

大日本帝国(日帝)支配期間は、以前の暗い韓日関係をより悪化させる期間であっただけでなく、以後の韓日関係の正常な回復をほぼ不可能にさせた期間でもある。韓日間では、人種的、文化的にもっとも近いというだけの理由で葛藤の治癒がより難しいと見ることができる。人種的、文化的に最も近い韓日両国間が「支配-被支配」関係で変質し、伝統的に日本を軽蔑してきた多くの韓国の知識人にとって、日帝が朝鮮を日本化しようとするとはとうてい受け入れることができなかった。創氏改名は、その代表的な例だが、日帝の全ての朝鮮内の開発事業も韓国人には大陸侵略のためと認識せざるを得なかった。一方、日帝としては、朝鮮内での抵抗が強ければ強いほど、より苛酷な弾圧で対応した。民族的葛藤のゴールがとて深くなり5年以後にも治癒しがたい状態になってしまったのだ。

しかも日帝は、統治の便宜上、相当な数の韓国人をいわゆる「手先」として利用しようとした。生きていくために日帝に協力せざるを得なかった数多くの韓国人がいたのは事実だ。しかし、朝鮮の指導層の人事として日帝の集中的な脅迫と誘惑に屈服し、多くの韓人を日帝の指令に従うよう誘導した人物も少なくなかった。これによって、民族内部の分裂が生じ、日帝に積極的に協力した人々は、解放後、日帝に加担して反逆した親日派(‘附日派’?)としてこれまで韓国社会で清算しなければならない対象となってしまったのだ。

日帝に対して韓国人は屈服、ないしは抵抗という二者択一だけではない。日帝に抵抗したもっとも代表的な韓国人、安重根は、事実、はじめからテロリストの道を選ばなかった。むしろ彼は、アジアの平和と反映のために韓国と中国、日本が力を合わせるべきだと主張した。しかし、日本の意図を純粹に受け入れた彼の夢が日帝の侵略により崩れたことに対し極端に幻滅を感じ、行動の方向を変えたのだ。このように朝鮮の独立運動は、民族主義展開のひとつの運動形態として進行し、その内部ではアジアの共存繁栄という基本前提もあった。

第二次世界大戦が終了後、韓半島は南北に分断され、日本は、戦前軍国主義の遺産を完全に清算できず、相当なほどそのまま存続した。天皇制の内容は変わったとしても、外観上、天皇は戦争の責任の免除を受け、在位することになり、戦争前の指導層の性格も引き続いている面も少なくない。このようなことはもちろん、国内的要因によることもあるが、新しい国際的勢力争いの結果であることは理解できることだ。

しかし、韓国人の中には韓半島分断の根源的責任は、日帝の支配にあるとみる人がいる。すなわち、日帝の支配地域だったためにアメリカとソビエトは、韓半島に軍事的進出を試図したとみるのだ。このような論理は全的で妥当ではないが、歴史的淵源を探してみる時、相当な共感を得ることのできる主張のみならず、特に感情的な反日論として利用されやすいのだ。特に、分断の原因となる韓国戦争(朝鮮戦争)の勃発は、解放後、韓国の復興計画を挫折させてしまった。

戦争の過程で、韓国人が多大な犠牲を受けた半面、日本は戦争需要を受け、第二次世界大戦の被害から抜け出せる好機をつかんだ。日本としては、潜在的産業復旧能力があったため可能だったが、韓国人の目には、韓国の不幸が日本では経済回復の起爆剤として利用されたように映った。韓半島の南と北は、互いに戦争をしながら、その戦争を経済的好機として利用する日本に対して共通した不満を抱くことになった。

そのため、日本との国交正常化は、国民情緒という点からみた時、非常に難しい課題だった。朝鮮半島、韓国と日本の国交正常化は事実、非正常的な状況下で成り立った。当時、ベトナム戦争をしていたアメリカとしては、韓国と日本が力をあわせてアメリカが主導するアジアでの冷戦構図を確固し、ベトナム戦争で勝利をおさめる意図があったため、韓日二カ国の国交正常化を積極周旋する立場であった。韓国も経済開発の促進のため、資金と技術が必要だったため、早急に正常化交渉を結ぼうとした。日本もやはり、韓国との国交正常化を成立させ、日帝の遺産から簡単に抜け出そうとしただけでなく、経済的な面で韓国に全面的な進出をしようとする意欲を持っていたのだ。

執権勢力間の利害関係のための妥協で、国民の反対を押し切って韓日協定は締結されたぶん、後遺症はそれだけ残ってしまった。当時、合意できなかつたり、伏せておいた問題が、後に表に出てくるたびに韓日間では、葛藤が再燃された。何よりも、在日同胞の法的地位問題、独島(日本名:竹島)領有権問題、「挺身隊」問題、漁業権の紛争がそれだ。これらの問題は、いつでも韓日関係を再び葛藤の局面に導く潜在的要素で、完全に解決しなければならない問題だ。

今日も韓日間に存在している疎遠と距離感は、両国の真の和解と真実の理解を難しいものにしてている。その原因は、他でもない不幸な過去の歴史の沈殿物が消されていないからだろう。これによって、韓国人の日本に対する確実な信頼が積み重なっていない。信頼を回復することのできる第一歩は、相互間で、過去の歴史の実態を正しく把握することだ。過去は、清算の対象ではなく、正しい認識の対象でなければならない。過去の歴史を繕ったり、歪曲したりせず、真実を究明しようとする真摯、かつ誠実な態度があらわれた時、韓国人は日本に対して信頼するだろう。

これは、日本人のためにも絶対的に必要だ。過去の経験は暗く、覚えていたくないにしても、これを正確に把握し、認識した時こそ、日本人はこれからの日本の方向と役割に対して責任ある立場に立つことができるためだ。国際的秩序に合わせていかざるを得なかったという積極的な姿勢や、国際秩序の樹立に強大国として参与しなければならないという大国意識の発露は全て日本が隣国から信頼を受けるのに役に立たない。不幸な過去に対する謙虚な態度は、過去の歴史に対する正しい認識からでてくるものだ。

過去の事に対する正しい認識が過去の過ちに対する絶え間ない謝罪であることを意味しない。これまで、天皇をはじめ日本の指導者が数えきれないほど謝罪を表明したにもかかわらず、我々にうまく受け入れられないのは、その謝罪が行動につながらない、儀礼的な表現に過ぎないためだ。過去の過ちに対する反省は、今日の行動を通じて読み取ることができる。

「戦争責任」という言葉がある。俗に、戦争と直接関連のない戦後の日本人に不幸な過去の責任を問えるかという論議をいう。もちろん、先代の過ちをそのまま具体的に抱え込むことはできず、そのように要求することもできない。しかし、日本という国家がW年を前後で途切れたのではなく、継続しているものなら、「歴史の実態としての国家」の構成員、すなわち日本国民という範疇を抜け出すことはできない。これは、帰属されるべき主体である国家に対する国民の義務で、その義務の履行は、対外的責任を確認するのにおいて明らかになる。敗戦後、ドイツの例がまさにこれを証明している。

日本の過去の認識態度をもとに論難する時に、「ナチスドイツ」の歴史を徹底的に反省し、賠償する戦後のドイツと比べて日本を批判することが多いが、このような批判に対して何年か前、日本の外務省責任者の答弁が我々の関心を引いた。すなわち、ドイツと日本の間には、事案の性格が違い、比べるのは不可能だということだ。ドイツでは、「ナチス」勢力を他の部類の人としてみ、全ての責任を彼らの転換できたが、日本ではそのような部類がないため、比べることができないという内容だ。

そうであれば、なぜドイツ人は他の部類の人々が犯した犯罪的行為に対して今も被害補償をしているのか？日本には、ナチスのような部類がないというのならW年以前、日本には過ちを犯す人はいないということになる。一方、誤ったことをしたとすれば、「ナチスのような部類が日本人の中にはいないため」、結局日本人全員が過ちを犯した共犯になることになる。過去の事の否定的な面を認定すれば、日本人全体を共犯化させる深刻な論理的矛盾に陥ることになる。一方、不幸な過去の事を認定しないというなら、これは周辺国との関係から見たとき、危険な問題にならざるを得ない。日本という国と日本国民という歴史の実態の連続性を考慮しない矛盾した論理だ。

日本の近代史は、他の国から探しがたい成功と挫折、勝利と敗北、被害と加害などで点綴している。このような多様な国家的経験を正しく認識すれば、現在の大きな資産となりえ、健全な未来の土台を作れるはずだ。過去の事に対する正しい認識は、歴史的真実の理解-実態的史実の把握と、そこに内在する意味の確認過程だ。受け入れにくい暗い過去の事でも日本の近代国家変遷史を構成する内容で重く受け取り、これをアジアと世界の平和構築のための過ぎた時代の犠牲とするならば、暗い過去の事は、明るい未来の平和を成し遂げるための反面教師となることもある。

日本はもう、日本自体の栄光たる過去を生き返らせ、国民に悟らせ、国家の位相を高めるより、人類の普遍的価値を追求し、国際的平和を成し遂げていくことで新しいモデルの先進国-「平和強国」となれば、と願う。これは、周辺国の信頼を得ることで可能になる。この時、過去の事は束縛ではなく、正しい認識を通じて信頼を得ることのできる土台となる。

俗に、葛藤をかもした国々の間には .過去の事の正確な把握(正しい認識のための努力) .被害者氏に対する謝罪(信頼の回復) .容赦と和解、の三段階を経て、善隣友好の関係を結ぶことになるという。しかし、過去の事を正しく認識するための意思の具体的表現のはじめの段階は、最後の段階である和解の同時的過程でもある .一つの段階は、一段階にもなり得るという事だ。

日本は、今日韓国と中国の「実態」を認識しながら、これらの国々に対する罪意識よりも過去に対する責任意識を持って、平和と反映の媒介者となる道を模索することが望ましい。